

はじめの一步

テクニカル分析

ハンドブック2(初級編①)



T E C H N I C A L A N A L Y S I S

NTAA[®]
The Nippon Technical Analysts Association

国際テクニカルアナリスト連盟(IFTA)加盟
日本テクニカルアナリスト協会[®]
特定非営利活動法人(NPO法人)

はじめに

本小冊子は、前号『はじめの一步 テクニカル分析 ハンドブック(基礎編)』に続いて一步進め、テクニカル分析とは何かについて、さわりの部分のお話をします。

テクニカル分析には様々な手法がありますが、ここではローソク足、トレンドライン、移動平均線の3つについてご紹介します。

ローソク足は、日本で考案された価格記録法で、始値・高値・安値・終値の4本値だけを記録しているにもかかわらず、その時々相場状況を示唆してくれます。現在では世界中で利用されています。

トレンドラインと移動平均線は、価格推移の大きな傾向、すなわちトレンドを知るための手法です。このような分析手法をトレンド分析といいます。トレンド分析は、かなり古くから使われていたようですが、広く普及したのは、ここ半世紀のことです。

本書をご覧になることにより、投資家が何を考えてテクニカル分析を考案したのか、テクニカル分析とはどういうものかについて、興味を持っていただくきっかけとなれば幸いです。私たち日本テクニカルアナリスト協会が推進している「テクニカル分析」は、皆さんの資産運用の一助になることを確信しています。

Introduction

目次

A	ファンダメンタル分析	3
B	テクニカル分析	4
C	ローソク足	6
	1. ローソク足の起源	7
	2. ローソク足の描き方	8
	3. ローソク足の見方	8
	4. 影の長い足	10
D	トレンドライン	12
	1. テレンドの起源	13
	2. テレンドラインの提唱者	15
	3. 上昇テレンドラインと下降テレンドライン	16
	4. 上昇テレンドラインの見方	17
	5. 下降テレンドラインの見方	18
	6. テレンドの継続とは	20
	7. 頭としっぽはくれてやれ	21
	8. 直線だから効果がある	22
E	移動平均線	24
	1. 移動平均線の起源	24
	2. 移動平均の計算方法	26
	3. 移動平均線の見方	27
	4. グランビルの法則(買い)	28
	5. グランビルの法則(売り)	29
	6. 移動平均線の弱点	30
	7. 計算期間の異なる2本の移動平均線	31
	8. ゴールデン・クロス(GC)とデッド・クロス(DC)	33
	9. 移動平均線のまとめ	34
	終わりに	35

A

ファンダメンタル分析

Fundamental analysis

ファンダメンタル分析では、投資対象には本質的な価値があると考え、それを見積もり市場価格と比較することで割高・割安を判断します。

数十年に及ぶ企業業績と株価を比較すると、おおむね連動しており、業績が拡大する時には株価が上昇、後退する時には低迷する傾向が見られます。

企業の本質的な価値は、企業が保有する資産の現在価値と、企業が将来にわたって株主へ還元するはずの配当を、現在価値に換算して推測します。しかし、将来の配当額や、換算する時に用いる将来の金利水準などは的確に予想できるでしょうか。

通常、企業価値は数カ月から数年をかけてゆっくり変化しますが、株価は企業価値の変化を先読みして動く性質があります。また、株価は上昇する時は緩やかですが、下降する時は上昇時の何倍も速く下がります。このため、買う時は、ファンダメンタル分析で業績の好転を確認してからでも間に合いますが、売却する時は、業績の悪化を確認してからでは遅すぎるという指摘もあります。

このことから、ファンダメンタル分析は、どちらかというと投資対象を選別するのに向いており、売買タイミングの把握には向いていないのではないかという意見があります。

B

テクニカル分析

テクニカル分析では、価格は需給関係で決まる部分が大きいと考えます。投資家が割安と思えば買われて上がり、割高と思えば売られて下がります。投資家の思惑や行き過ぎを含んでいるので、本質的な価値をいつも正しく反映しているとは限りません。

また、誰でも自分に身近な業界のことは門外漢より詳しいものです。そして、事情に明るい人の判断は、知らない人よりも早くて確かなはずです。一般人に先行するこれらの事情通の投資行動は、すべて価格と出来高の推移に記録されていますから、価格と出来高を詳しく分析すれば、先行者の動きを察知できる可能性があります。

さらに、大きな価格変化は投資家心理に強い影響を与えますが、これは時代や市場参加者が異なっても変わりません。つまり、歴史は繰り返される可能性があります。このように、現在までの価格や出来高の推移から、将来の価格推移を予測しようとする手法をテクニカル分析といいます。

テクニカル分析は、価格の変化に注目しているので、いつ売買すればよいかという売買タイミングを知ることはできます。しかし、本質的価値には注目していないので、分析対象が投資対象として適切かどうかは分からないのではないか、という指摘があります。

そこで、テクニカル分析とファンダメンタル分析を組み合わせ、両者の欠点を互いに補完し合い、双方の長所を生かせば、投資の際に頼りとなる情報になるのではないのでしょうか。



C

ローソク足

株式など金融商品の価格推移は、ローソク足と呼ばれるチャート(グラフ)で表示されるのが普通です。1本1本の形がローソクに似ているのでこう呼ばれます。

ローソク足の「足」(あし)は、むかし価格推移を記録したものを足取表と呼んだことに由来しますが、2通りの意味があります。

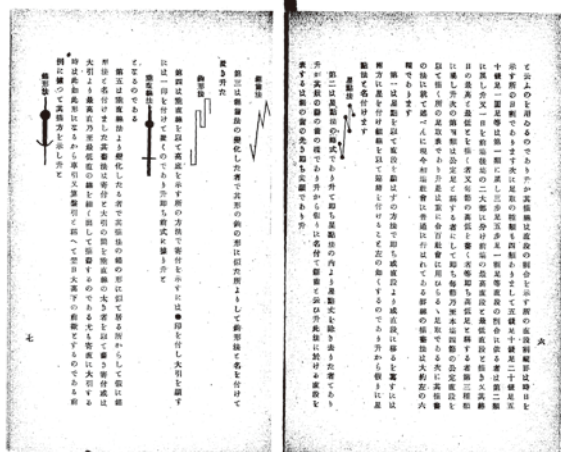
1つは記録する時間の単位で、1日の値動きを1本にまとめて記録したものなら日足(ひあし)、1週間なら週足(しゅうあし)、1か月なら月足(つきあし)というように使います。もっと短い1分足、5分足などというものもあります。もう1つは描画スタイルのことです。現在は株価チャートといえばローソク足ですが、明治時代には棒足やカギ足が一般的で、他に星足、新値足などの描き方もありました。カギ足や新値足は、現在でもたまに見かけることがあります。足のことを「足形」(あしがた)、あるいは単に「線」ということもあります。

1. ローソク足の起源

ローソク足の考案者は本間宗久だとする説を時々耳にします。しかし、国立国会図書館の蔵書にある『相場罫線術講義』(早坂二菊、1904年)という本を読むと、本間宗久が使ったのは一般的に使われている足とは異なり、「陰陽切替足」という独特のものだと書いてあります。描き方の説明を読むとカギ足的一种であることが分かります。

一方、ローソク足の語源となったと思われる「蠟燭引」(ろうそくびき)という言葉を紹介した井上広吉は、「足取の原理」(1920年)の中で、蠟燭引は始値と終値の間を太く描くように変形した棒足の一種だとしています。

ところが、この棒足の変形は、先の「相場罫線術講義」では「錨形法」として紹介されており、世間で一般に使われている方法の1つだと書かれています。どうやら、本間宗久と蠟燭引はつながらないようです。



左端が錨形法。『相場罫線術講義』

2. ローソク足の描き方

日足を例にとると、まず1日の最高値と最安値を結んで垂直線を引きます。次に始値から終値までを長方形に描いて垂直線に重ねます。最後に、始値よりも終値の方が高ければ長方形を白抜きにし、終値の方が安ければ黒く塗りつぶします。上昇した日の白抜きの線を「陽線」、下落した日の黒塗りの線を「陰線」と呼びます。

この時の長方形を「実体」(じったい)と呼び、実体の上端から最高値までの線を上影(うわかげ)、実体の下端から最安値までの線を下影(したかげ)といいます。影をヒゲと呼ぶ人もいます。

始値から終値までの値動きが主力の動きなので目立つように四角く太く描き、影は勢いが余って行き過ぎたものの、その後押し戻されて修正されたオマケの部分なので1本の線として細く描くのです。

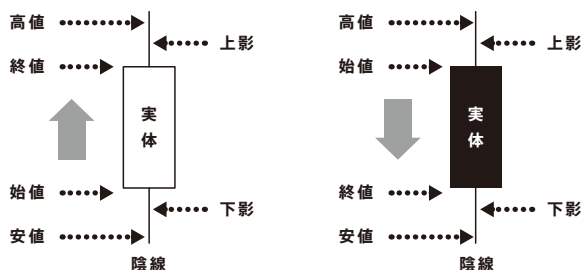
3. ローソク足の見方

ローソク足は、1本でいろいろなことが分かります。例えば、買い手や売り手の勢いの強さは、実体の長短で分かります。買い手が強ければ大幅に買い上がるので長い陽線となり、

売り手が強ければ大幅に売り叩くので長い陰線となります。どのくらい長ければ長大線といえるかというと、銘柄にもよりますが、実体の長さは平均すると価格の1%程度なので、2~3%以上あれば長大線と見てよいでしょう。このような足はひと月に1回現れるかどうかです。

実体が長くて影が短い場合の解釈は簡単です。大半の投資家がその値動きに追随したということを意味しており、勢いの強さを表します。ただし、行き過ぎたまま終わったという可能性もあります。

実体も影も短い足は、売り手と買い手の勢力が拮抗しているか、方向感がなく投資家が様子を見ているか、さもないければ誰も関心がなく放置されているかです。どのくらい短ければ短小線かという、銘柄にもよりますが、最高値から最安値までの長さが価格の0.5%程度以下の足と考えてよいでしょう。このような短小線は、ひと月に1回現れるかどうかです。



ローソクは1日の値動きを表している

4. 影の長い足

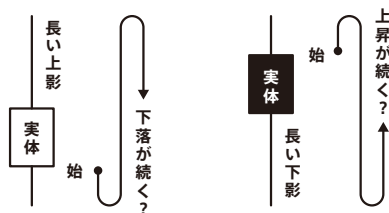
影が長い場合も注目されます。最高値から最安値までの長さは平均すると価格の2～3%程度ですから、その程度以上の長さの足で片方の影が全体の半分以上あるようなものは希少な足で注目されます。

影の長い足は一般に、影と反対方向に向かいやすいと言われます。例えば、下影の長い足(下影線)は大幅に売り込まれたものの結局は値を戻したのだから買い手の勢いが売り手の勢いを上回って終わったと考えられます。従って、翌日も買い優勢で始まるかもしれません。反対に上影の長い足(上影線)であれば、途中大きく買われたものの最後は押し戻されたのだから売り優勢で終わったと考えられ、翌日も安いかもしれないというわけです。

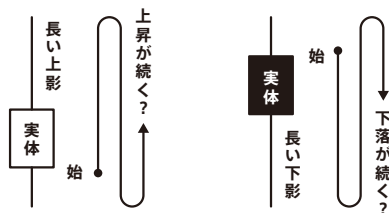
この説明に違和感は少ないと思いますが、落とし穴があります。長い影が先にでき、後で短い影ができたとするとうどうでしょう。最後は長い影の方を向いて終わったことになり、先ほどとは正反対に、価格は引き続き長い影の方へ向かいそうな印象になります。しかし、ローソク足を見て、どちらの影が先にできたかを知る方法はありません。実際はどうなのでしょう。統計的に調べてみると、上影線は上昇局面で出現することが多く、下影線は下降局面で出現することが多いことが分かります。現実には、長い影の方へ動く場合が多いのです。上昇局面では買い手の

先鋒が敵地へ攻め込んだものの押し返された痕跡、下降局面では売り手の先鋒が攻め込んだ痕跡と考えた方がよいのかもしれません。もちろん、長い影と反対方向に動く場合もありますから、注意が必要です。

1本のローソク足でも、これだけのことが言えるのですから、2本、3本の組み合わせでは、さらにいろいろな推測ができます。古くから多くの投資家が研究してきていますが、組み合わせの種類が多くて煩雑な上、統計的に有意性があるかどうか疑わしいものも含まれています。興味のある方は調べてみてください。



一般的には長い影と反対の方向へ向かいやすいとされる



長い影が先なら、長い影の方へ向かう印象が強まる

D

トレンドライン

トレンドとは、英語で「傾向」や「流行」という意味ですが、相場の世界では価格推移の「傾向」や「方向性」のことを指します。上昇局面であれば「上昇トレンド」、価格が一定の方向に長い間推移すれば「長期トレンド」、価格変化が急激で大きければ「強いトレンド」などといいます。



1. トレンドの起源

宝暦6(1756)年に初版が出たといわれる古い相場書、猛虎軒の「八木虎之巻」(はちぼくとらのまき)には、「然れば人の気分陽に進み登りつめたる時は陰来たりて陰に趣き下る物なり。又陰に下りつめる時は陽来たりて上る物なり。此の道理も月日の違い時節の違いはあるといえども凡そ此の陰陽の理に外る事なし」とあります。

人氣が強気に傾き上昇が極まった時には下落に転じ、下げきった時には上昇に転じる。時期や時節の違いはあるがこの繰り返しは変わらないという意味で、上昇トレンドと下降トレンドは、交互に繰り返すものだということを指摘しています。トレンドに類する言葉は使われていませんが、250年以上も前に、既にその概念があったことがうかがえます。

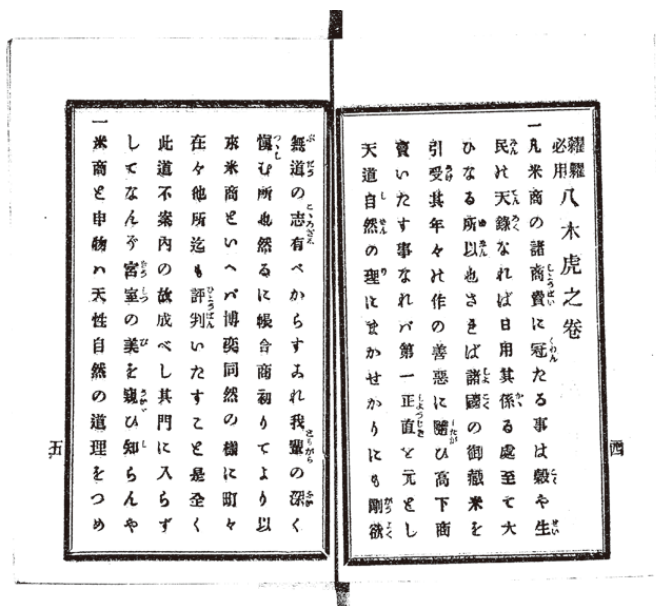
トレンドはなぜ生じるのでしょうか。現在は次のように考えられています。

上昇局面を例にとると、目ざとい投資家が好材料に気づいて買うと価格が少し上昇します。日が経つに連れ材料が伝わり買い手も増えてさらに上昇します。上昇は投資家の耳目を集めるので、ますます上昇相場が本格化するという筋書きです。いかにもありそうな気がします。

しかし、1950年頃、米国を中心とする経済学者から、株

価変動には規則性がなく、ランダムに変化するという研究が相次いで発表されました。この発表は反響をよび、多くの研究者によって何度も検証され、20年近くをかけて徐々に事実として受け入れられていきました。

株価変化がランダムだということは、トレンドが投資家心理や需給のせめぎ合いがなくても生じることを意味しています。それはともかく、トレンドが存在しないわけではありません。



最古の相場書の1つ、猛虎軒『八木虎之卷』

2. トレンドラインの提唱者

トレンドが分かれば、投資で利益を上げるのは簡単です。上昇トレンドなら買い、下降なら売ればよいのです。ところが、日々の価格は、その時々ニュースや需給を反映して細かく上下し、トレンドが分かりにくのが一般的です。

トレンドを知るには、ささいで邪魔な変動を除去し、大局的な傾向を把握する必要があります。その方法の1つがトレンドを示唆する直線を引くことです。この線をトレンドラインといいます。

トレンドラインに関する最も古い記述は、井上広吉が1914年に出した『株式売買要訣』のようです。「足取の相当なる下節と下節とを、或は上節と上節とを結びて、一直線を引き之を延長し且つ現在の足先を延長し之を会わせしめて、今後の節となる値段を予想すべし」と書いています。これは明らかにトレンドラインの引き方と使い方の説明ですが、残念ながら、井上はこの線や手法に名前を付けていません。

トレンドラインの名を用いて詳しく説明したのは、米国のロバート・エドワーズとジョン・マギーが1948年に書いた“Technical Analysis of Stock Trends”です。

この本はテクニカル分析のバイブルともいわれ、何度も新しい知識で加筆・修正され、改訂版が出ています。

3. 上昇トレンドラインと 下降トレンドライン

トレンドラインには、上昇トレンドを分析する「上昇トレンドライン」と下降トレンドを分析する「下降トレンドライン」の2つがあります。「上昇トレンドライン」は別名で「下値支持線」や「サポートライン」とも呼ばれます。一方、「下降トレンドライン」は別名で「上値抵抗線」や「レジスタンスライン」とも呼ばれます。

「上昇トレンドライン」はトレンドが上昇傾向と判断できるなら、その間の節目となる安値同士を結んだ線を延長したラインです。「下降トレンドライン」はトレンドが下降傾向と判断できるなら節目となる高値同士を結んで延長したラインです。

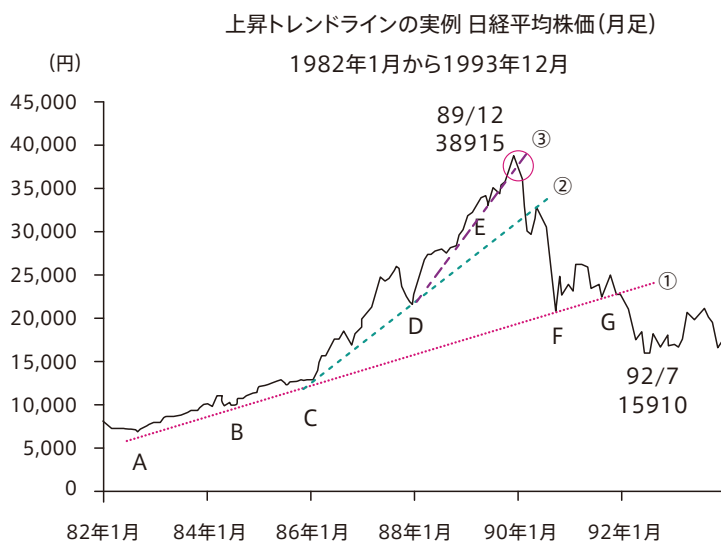
そして、これらの延長されたトレンドラインが破られる時点、すなわち上昇トレンドラインなら株価が同ラインを割り込む、あるいは下降トレンドラインなら株価が上回るなどが、トレンド反転のシグナルになります。



4. 上昇トレンドラインの見方

下図は日経平均株価の月足チャート(1982～93年)です。バブル相場の過去最高値38,915円(1989年12月)から下落し、下降相場に反転する兆しを捉えた上昇トレンドラインの具体例です。①のラインはAとBを結んで延長した上昇トレンドラインです。②のラインはCとDを結んだライン、③のラインはDとEを結んだラインでいずれも上昇トレンドラインです。②から③のラインにかけて株価の上昇ピッチが速くなったことが分かります。

株価の反転ポイントを見極める判断は③の上昇トレンドラインを株価が下回ったところです。82年から約8年間にわたる長期上昇相場の変調を見事に捉えていました。



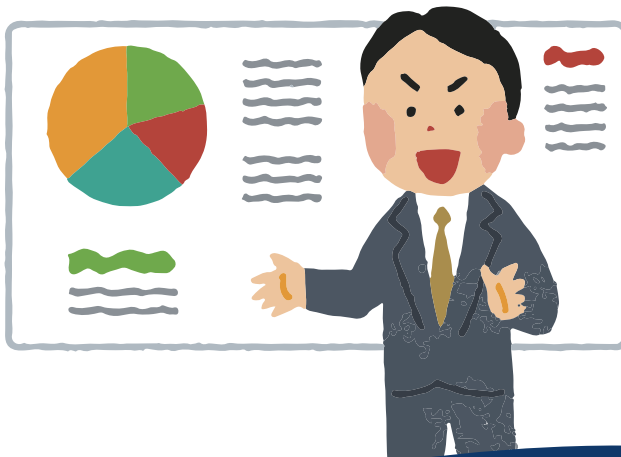
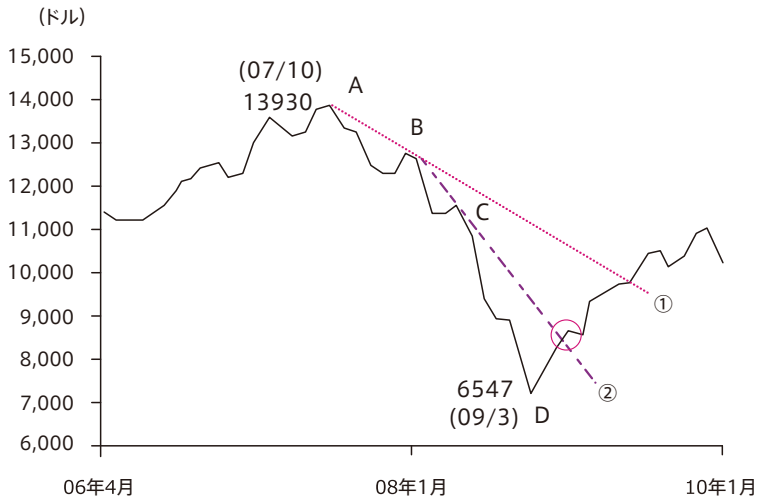
5. 下降トレンドラインの見方

次頁の図は2006年から2010年までの米ダウ工業株30種平均株価の月足チャートから下降トレンドラインの具体例を見たものです。同株価は07年10月の高値13,930ドル以降、100年に一度と言われた「リーマンショック」からの金融危機で6,547ドル(09年3月)まで暴落しました。①の下降トレンドラインはAとBを結んで延長したラインです。②の下降トレンドラインはBとCを結んだラインです。それはBからの下げピッチが速くなった動きを捉えるため、追加したラインです。

株価の反転ポイントは②の下降トレンドラインを上回ったところであり、その後の大きな反騰につながっています。とりわけ①の下降トレンドラインを株価が上回った時点で、上昇トレンドへの信頼感がより強まったと言えます。トレンドライン分析には、レベルライン分析、細かな動きを捉えるチャンネルライン分析、長期波動を見るファンライン分析、横ばいトレンドの考え方について、などの分析方法があります。



下降トレンドラインの実例 ダウ工業株30種平均(月足)
2006年4月～2010年1月



6. トレンドの継続とは

上昇トレンドが継続している状態とは、節目となる安値が直前の節目となる安値を上回り、同時に節目となる高値が直前の節目となる高値を上回る状態を指します。つまり、節目となる安値、節目となる高値の両方とも上昇している状態です。

反対に、下降トレンドが継続している状態とは、節目となる安値が直前の節目となる安値を下回り、節目となる高値が直前の節目となる高値を下回る状態を指します。つまり、節目となる安値、節目となる高値の両方とも下落している状態です。

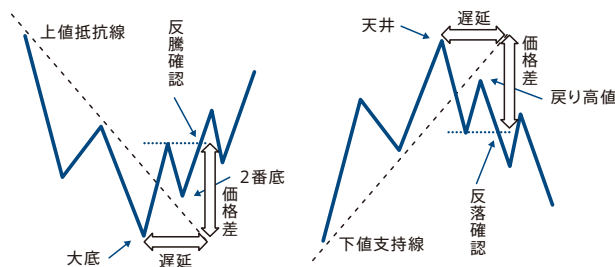
したがって、全体的には上昇しているように見えても、節目となる安値や高値のどちらかが直前の節目を超えない場合や、全体的に下降しているように見えるのに、節目となる安値や高値のどちらかが直前の節目を下回らない場合には、トレンドが変化し始めている可能性がありますから注意が必要です。

7. 頭としっぽはくれてやれ

トレンドは、どのような状態になったら反転したといえるのでしょうか。典型例を挙げると、底を打って反騰に転じる場面(次ページ図左側)では、価格が上値抵抗線を超えた後につける2番底が、大底や上値抵抗線を割り込まずに反発し、直前の節目となる高値水準を上回ったタイミングとなります。

反対に、天井をつけて反落に転じる場面(下図右側)では、価格が下値支持線を割り込んだ後につける戻り高値が、天井や下値支持線を超えずに反落し、直前の節目となる安値水準を割り込んだタイミングとなります。

トレンド転換の判断は、実際に価格が大底や天井をつけて反転したタイミングから時間的にずいぶん遅れており、その間に価格も動いていて損をしているように感じるでしょう。これが相場格言に言う「頭としっぽはくれてやれ」の意味です。つまり、トレンドの転換をしっかりと確認してから行動を起こせということです。



反転の確認にはタイムラグがある

8. 直線だから効果がある

トレンドラインは、過去の節目を結んで将来に引き伸ばされた直線なので、硬直した過去の線という印象があります。しかし、その後の価格推移では変化しない線だからこそ効果がある場合もあります。価格が現状のまま推移したらいつ頃トレンドラインをまたぐか、その価格水準はいくらかを事前に想定できるのは、直線だからです。

日々動く相場の中で、我慢してポジションを保持すべきか手仕舞うべきか迷うことは少なくありません。しかし、トレンドラインは、価格がこの水準をまたいだらポジションを維持してもメリットが少ないということを示唆してくれる場合があります。言い換えれば、トレンドラインが自分自身に「諦めろ」と引導を渡してくれるわけで、貴重な警告を発するツールという側面も持っています。

トレンドラインは、手作業で引くことが多いので恣意的だという批判があります。特に、過去の相場に対して線を引く時は、結果が分かった状態で引くので、都合のよい線を引いてしまいがちです。

しかし、節目となる高値や安値を抽出する判断基準を明確に定義すれば、コンピューターで節目を選び、それらを結んでトレンドラインを自動的に引くことができます。

トレンドラインは決して過去の遺物ではなく、誰でも使うことができ、現在も効果が期待できるテクニカル分析手法の1つです。



E

移動平均線

ささいで邪魔な変動を除去し、トレンドを抽出する方法に、凸凹をならすという方法があります。一定期間の価格を平均することで小さい変動を除去するのです。時間軸を1単位ずつずらしながら平均値を計算し、それらを結んで線にするので移動平均線といいます。英語のMoving Averageを略してMAということもあります。

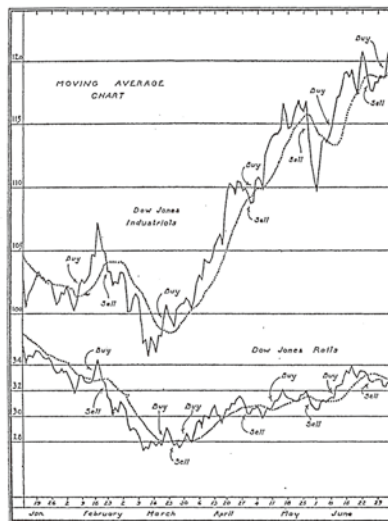
トレンドラインは、基本的に価格推移の外側に引かれますが、移動平均線は価格推移の中に引かれることもあります。価格推移から自動的に線が計算されるので、作成者の思惑に左右されることはなく、価格推移の変化が逐次、自動的に反映されます。移動平均線は、価格推移のトレンドを示していますから、広い意味ではトレンドラインの一種と見なすことができます。

1. 移動平均線の起源

移動平均線の歴史は古く、日本では約100年前、岩谷楽泉が『期米観測楽泉秘録』(1913〈大正2〉年)の中で平均引として、阿部熹作は『最新罫線株米大勢測定口伝』(1916〈同5〉年)の中で阿部式極秘大勢方針引として3日移動平均を紹介しています。

米国では、リチャード・ワイコフが発行していた投資情報誌“Stock Market Technique”の1935年9-10月号でダウ工業株30種平均の移動平均線が紹介されています。

しかし、普及したのは米国のジョセフ・グランビルが“Granville's New Strategy of Daily Stock Market Timing for Maximum Profit”(1960〈昭和35〉年)を出し、日本ではその邦訳「グランビルの投資法則—株価変動を最大に活用する戦略」(1962〈同37〉年)が出てからのことです。



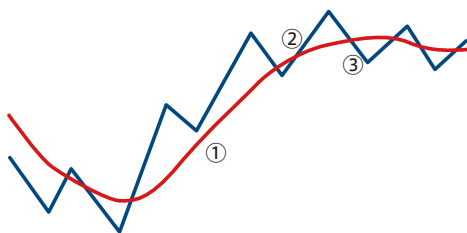
“Stock Market Technique” (1935年)に掲載された図

2. 移動平均の計算方法

一番簡単なのは単純移動平均です。日足なら決めた日数分の終値の平均値を計算します。計算期間は、日足では5日、25日をよく用いますが、これは1週間や1カ月の日数を意識したものです。平均値は計算期間内の価格の凸凹をならしめますが、同時にその間に発生した周期的な変動を消す作用もあるからです。

週足では13週、26週、52週をよく用いますが、これは四半期、半年、1年以内の季節的変動も除去しています。月足では12カ月、24カ月、60カ月がよく用いられますが、60カ月移動平均ではキチン・サイクルと呼ばれる短期の景気循環の影響も除去されていることになります。

移動平均線は、通常、ローソク足など価格のチャートに付加する形で表示します。

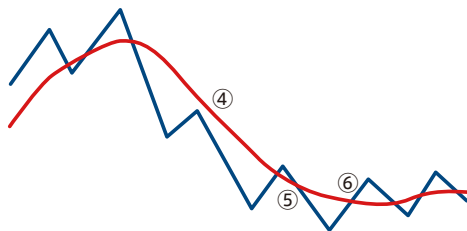


移動平均線が右上がりの時は上昇トレンド

3. 移動平均線の見方

前ページの図中①のように、移動平均線が右上がりなら、上昇トレンドにあることを示唆します。同②のように価格が右上がりの移動平均線を下から上に突き抜ける場合には、上昇ペースの加速を意味し、同③のように上から下に割り込む場合には上昇ペースの鈍化を意味します。その後、移動平均線が右下がりに転じれば下降トレンド入りとなります。

反対に、同④のように右下がりなら、下降トレンドにあることを示唆します。同⑤のように価格が下降する移動平均線を上から下に割り込む場合には、下降ペースの加速を意味し、同⑥のように下から上に突き抜ける場合には下降ペースの鈍化を意味します。その後、移動平均線が右上がりに転じれば上昇トレンド入りとなります。これが基本的な見方で、価格推移はこれらの変化を繰り返しています。



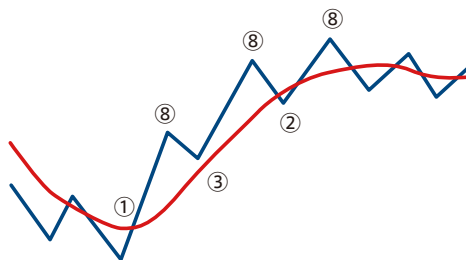
移動平均線が右下がりの時は下降トレンド

4. グランビルの法則（買い）

グランビルは、価格と200日移動平均線の位置関係から8つの投資法則を導きました。

買いシグナルとして、次の4つを挙げています。

- ① 右肩下がりの移動平均線が横ばいもしくは上向きへ転じつつ、株価が同線を上回る局面。
- ② 右肩上がり移動平均線に対し、株価が同線の下方まで反落するものの、下げ渋る局面。
- ③ 右肩上がり移動平均線に対し、株価が同線手前まで反落するものの、下げ渋る局面。
- ④ 右肩下がりの移動平均線に対し、株価が同線を大きく下放れる局面、の4つです。



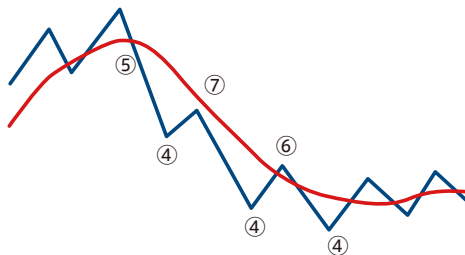
上昇局面での法則：①、②、③は買い、④は売り

5. グランビルの法則（売り）

売りシグナルとして、次の4つを挙げています

- ⑤ 右肩上がりの移動平均線が横ばいもしくは下向きへ
転じつつ、株価が同線を下回る局面。
- ⑥ 右肩下がりの移動平均線に対し、株価が同線の上方
まで反発するものの、戻りが鈍い局面。
- ⑦ 右肩下がりの移動平均線に対し、株価が同線手前ま
で反発するものの、戻りが鈍い局面。
- ⑧ 右肩上がりの移動平均線に対し、株価が同線を大きく
上放れる局面、の4つです。

上記の①から⑧が売買シグナルとなった事例は多数散見されます。しかし、この法則に絞って検証すると、「ダマシ」が多いのも事実です。利用する際には、他のシグナルも確認するなど、注意が必要です。「ダマシ」とは、結果的に収益を得るチャンスがなかった売買シグナルのことを指します。

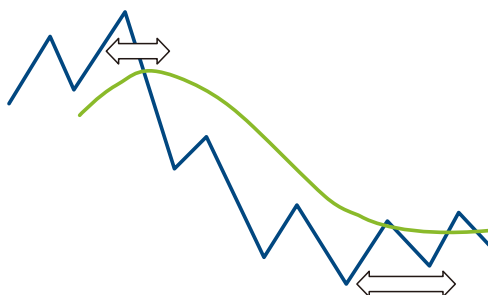


下降局面での法則：⑤、⑥、⑦は売り、⑧は買い

6. 移動平均線の弱点

単純移動平均線は、実際の価格推移よりも計算期間の半分だけ遅行する性質があります。計算期間が短期間の場合は遅行期間も短くて済みますが、長期間の場合は売買シグナルが大きく遅行し収益機会を逸する恐れがあるため注意が必要です。

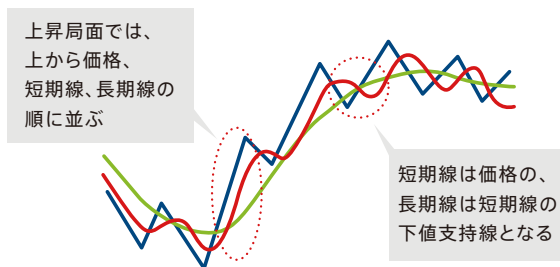
例えば、グランビルが推奨する200日移動平均線が方向転換するタイミングは、実際に価格が方向転換した日より約100日遅れています。言い換えれば、現在の200日移動平均線が示唆するトレンドは100日前のものです。100日前の価格情報でこれからの投資判断をするのは難しいと言わざるを得ません。的確にタイミングを知りたいければ、より短期間で計算するのも1つの方法です。計算期間は短くするほど日々の価格変動の影響を受けやすくなり中長期のトレンドの把握が難しくなるなど、一長一短です。



移動平均線の転換は価格より遅れる

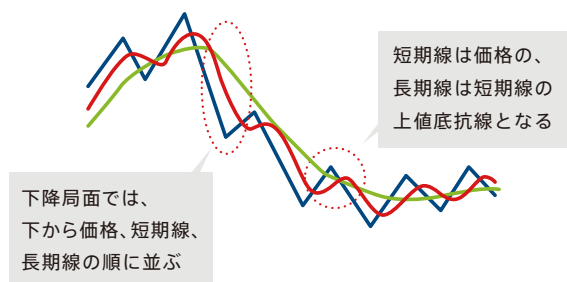
7. 計算期間の異なる 2本の移動平均線

価格は日々変動し、不規則な推移をします。価格が移動平均線をまたいだからといって、それまでのトレンドが転換したとは言い切れません。そこで、価格の代わりに計算期間の短い移動平均線を用いる方法があります。一般的に、移動平均線は2本の線を用いることが多いです。計算期間の長いものは、長期移動平均線(長期線)、短いものを短期移動平均線(短期線)といいます。その中間の中期移動平均線(中期線)も用いることがあります。価格と短期線・長期線は上昇局面と下降局面では、それぞれがチャート上で推移する位置関係が異なります。上昇局面では、上から価格、短期線、長期線の順番に並ぶことが多いとされています。価格が下降しても短期線や長期線が下値支持線となって下げ止まったり、あるいは短期線が下降しても長期線が下値支持線となって下げ止まったりします。



上昇局面での移動平均線

下降局面では、下から価格、短期線、長期線の順番に並ぶことが多いとされています。価格が上昇しても短期線や長期線が上値抵抗線となり、上昇の勢いが抑えられたり、短期線が上昇しても長期線が上値抵抗線となって上値が押さえられたりします。

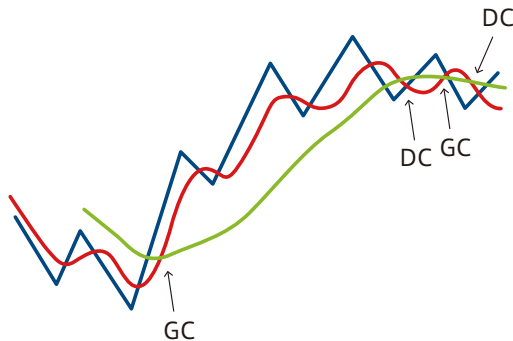


下降局面での移動平均線

8. ゴールデン・クロス (GC) と デッド・クロス (DC)

下降トレンドから上昇トレンドに変わる時には、まず価格が短期線を上回ります。次に短期線が上昇に転じて長期線を上回ります。これをゴールデン・クロスといいます。最後に長期線が上昇に転じ、上昇トレンドへ転換したと判断されます。

上昇トレンドから下降トレンドに転じる時には、最初に価格が短期線を下回ります。次に短期線が下降に転じて長期線を下回ります。これをデッド・クロスといいます。最後に長期線が下降に転じ、下降トレンドへ転換したと判断されます。



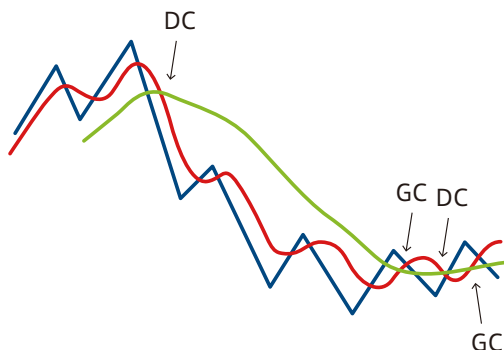
大きなトレンドでは、
GC買い・DC売り作戦は、利益が出やすい

9. 移動平均線のまとめ

価格が上昇に転じるときにはゴールデン・クロス、下落に転じるときにはデッド・クロスが起こりやすいとされています。そこで、ゴールデン・クロスで買い、デッド・クロスで売るという作戦が考えられます。

ところが、長期トレンドでは利益が期待できるものの、短期トレンドでは期待通りの結果になるとは限りません。移動平均線は実際の価格推移よりも遅行するため、長期線と短期線の交差も遅行するからです。

トレンドに沿って投資することを順張りといいます。順張りは中長期のトレンドを取りにいく投資手法です。中長期のトレンドは初心者にも分かりやすく、ファンダメンタル分析との相性もよいとされています。最もオーソドックスな投資戦略でもあり、まずは順張りからマスターするとよいでしょう。



終わりに

本小冊子は、資産運用と関連の深いテクニカル分析を知っていただき、学んでいただく1つのきっかけになればと考え書かれたものです。

資産運用の要諦は、安く買って高く売ることですが、どこが安くどこが高いかを判断するのは、極めて難しい問題です。特に運用期間が1年か5年か、それとももっと長いのか、期間の取り方によって価格水準の捉え方も変わってきます。

その際に知っておきたいのが、ファンダメンタル分析とテクニカル分析という手段があるということです。すべては学ぶことから始まります。NISA（少額投資非課税制度）は、それを実践する場です。

相場の世界は、アノマリー（科学的に説明のできない事象、相場の世界では経験則を指すことが多い）が多くありますが、過去の経験も大切なことです。あまり欲張らずに一步一步前進していきましょう。

本小冊子は、テクニカル分析の普及啓発を目的として書かれています。ご質問は当協会へご遠慮なくどうぞ。

Conclusion

「投資の日」、ご存知ですか？

1996年4月1日、より多くの方々へ証券投資に興味・関心を持っていただき、「貯蓄から投資へ」の流れを加速させる思いを込めて、日本証券業協会が「10(とう)」「4(し)」の語呂合わせから「証券投資の日」(10月4日)を制定しました。「とうしくん」は「証券知識普及プロジェクト」(証券投資の日)のマスコットキャラクターです。日本橋兜町生まれの男の子。より多くの人に「投資」を身近に感じていただきたい願いから2007年に生まれました。



10月4日生まれの男の子。ほのぼのとした外見ながら、今後大きく成長する期待大。
兄弟がほか9頭いる。(日証協ホームページより)

「証券知識普及プロジェクト」は
マスコットキャラクター「とうしくん」を作って投資を応援しています。

少額投資非課税制度(新しいNISA)と運用

生涯非課税での運用も可能 新NISA

「貯蓄から投資へ」を積極化するため、2014年に少額投資非課税制度(通称NISA)が始まり、10年目の2024年からは大幅な制度の拡充が図られます。新NISAでは、年間投資枠も大幅に増加し、現在の「一般NISA」(※株式等を含む運用)が「成長投資枠」に変更され、「つみたてNISA」も今後は「つみたて投資枠」となり、非課税保有期間も無期限となります。枠の再利用もでき、生涯非課税での運用も可能になります。

皆さんに平等に用意された入れ物は徐々に整ってきましたが、日本の個人金融資産は今でも安全資産が半分以上を占めています。この入れ物を最大限に生かすにはどのように考えればよいのでしょうか？

ファンダメンタル分析やテクニカル分析の知識を身にまとい、長期運用でよりよい成果を上げることが求められています。せっかくの制度ですから、大いに勉強してよりよい成果を目指しましょう。



「つみたてワニーサ」は、
NISAでのつみたて投資と皆さんの資産形成を応援する
金融庁公式キャラクターです。

テクニカル分析を勉強したい方へ

当協会の資格制度は、国際テクニカルアナリスト連盟(IFTA、International Federation of Technical Analysis)の資格制度に基づいています。

NTAA認定テクニカルアナリスト

CMTA®(Certified Member of the Nippon Technical Analysts Association)

誰でも挑戦できる初級レベルで、テクニカル分析に関する基本的な知識及び使用方法を学びます。約半年の通信教育の後、試験によって習熟度が判定されます。NTAAの資格です。

IFTA認定テクニカルアナリスト

CFTe®(Certified Financial Technician)

CMTA®取得者を対象とした中級レベルで、テクニカル分析を用いた適切な現状分析と投資判断の仕方を学び、マーケット・レポートが作成できることが求められます。約半年の通信教育の後、試験によって習熟度が判定されます。日本語で受験できる国際資格です。

IFTA検定テクニカルアナリスト

MFTA®(Master of Financial Technical Analysis)

CFTe®取得者を対象とした最上級レベルで、テクニカル分析に関する新たな手法、視点について論じた英語の論文を提出し、審査されます。国際資格です。



皆さん、通信教育講座を受けて、
資格試験にチャレンジしましょう。

資格試験に合格すると

IFTA認定資格の場合は、IFTAから認定証が授与されます。

またIFTAのデジタルバッジも発行されます。



当協会に
入会されると
各種特典のある
デジタル会員証が
発行されます。

はじめの一步 テクニカル分析ハンドブック2(初級編①)

2016年 4月1日 初版第1刷発行

2018年 4月1日 第4刷発行

2025年10月1日 2版第1刷発行

非売品

発行所 特定非営利活動法人 日本テクニカルアナリスト協会
〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町3-3

TEL 03-5847-2231 FAX 03-5847-2232

URL <https://www.ntaa.or.jp>

E-mail office@ntaa.or.jp

編集者 古城 鶴也

編集人 関 三男

発行人 東野 幸利

デザイン 杉野 寿一

印刷所 スターツM株式会社

